

輸入真菌症-現状とその問題点「司会の言葉」

西村 和子 亀井 克彦

千葉大学 真菌医学研究センター 病原真菌研究部門

わが国の国際化に伴い、輸入感染症の増加が問題となっている。真菌症では、原則的にヒト-ヒト間の直接感染が無いため、SARSに見られるような爆発的流行が無く、一見すると目立った症例数の変化がないように見えるが、真菌症においても同じように輸入感染症例の増加は明らかである。しかし、専門家が少ないこと、コクシジオイデス症を唯一の例外として医療機関の報告義務が無いことなどにより、これら輸入真菌症症例に関する情報は限られており、わが国における正確な実態は把握できていないといえる。一方、先進諸外国においては、大学医学部あるいは附属病院において、病原真菌及び真菌症専門の教室あるいはユニットが存在することが常識であり、教育を含めて真菌症に対する積極的な取り組みが行われている。これに対し、わが国では大学教育においては常勤の専門教官はほとんどおらず、附属病院における感染症専門医は、多くの場合一般細菌あるいはウイルスの専門家に限られているのが現状である。このワークショップでは、代表的な輸入真菌症を選び、その疫学、臨床経験を含めた疾患の解説に加え、輸入真菌症の新たな問題点である人獣共通感染症、あるいは検査室の感染事故につながりかねない輸入真菌症原因菌の取り扱いといったトピックスを交えて議論し、わが国における輸入真菌症の現状とその問題点を明らかにするとともに、真菌症教育・対策を再考する契機としたい。

Comment by the chairpersons

KAZUKO NISHIMURA and KATSUHIKO KAMEI

Dept of Pathogenic Fungi, Res Ctr for Pathogenic Fungi and Microbial Toxicoses,
Chiba University